

## 読まれる女性たち

——「將軍外戚評判記」と「大名評判記」——

望月 良親

### はじめに

増上寺で三代將軍徳川家光の側室永光院の法会が行われたとき、家光は「殊外御愁歎」していたが、法会の最中、なんと亡くなった永光院に「其儘似たる娘」を見つけた。家光は、この娘を江戸城に連れて帰った。この娘こそ、のちの四代將軍家綱を産んだ宝樹院であった。

この家光の側室であり、家綱の生母となった宝樹院が、召し出された経緯を知ることが出来る興味深い記述は、一連の「大名評判記」の中の一つ、『武家諫懲記後正』の「附録」の「外戚伝」にある。<sup>9)</sup>

「大名評判記」とは、一七世紀後半から一八世紀半ば

にかけて作成された大名の家系・家族、略歴、居城、領内の様子、支配の状況、主な家老、大名の人物、行跡・評判などを列挙し、論評を加えた書物である。<sup>10)</sup> 「大名評判記」は、万治から寛文年間（一六五七〜一六七二）のデータに基づいた『武家諫懲記』に始まる。その後、『武家勸懲記』・『諫懲記』・『土芥寇讎記』・『武家勸懲記後正』・『武家諫懲記後正』まで、およそ一世紀の間、書き継がれていった。その書き手についてはいまだ謎に包まれており、それを明らかにすべく、現在、日本各地に残る「大名評判記」の悉皆調査（多くは旧大名家の所蔵になるものである）を行っているところである。

この一連の「大名評判記」の最後の『武家勸懲記後正』に、將軍の正室や側室、乳母など、將軍にかかわった女

性たちの事績、系図等を記した書物が「附録」として収載されているのである。

ところで「將軍にかかわった女性たち」について述べたものとして、これまでよく知られているのは、『柳営婦女伝系』であろう。この書物は、古くは、一九一七年（大正六）に刊行された『柳営婦女伝叢』に、『玉輿記』とともに収録されている<sup>53</sup>。その後、現在にいたるまで、將軍の側室の女性を知る史料として、多くの研究に用いられてきた。斎木一馬は、「徳川歴代將軍の生母の素性」を調べるために、「後の編纂書であつて良質の史料を称するわけにはいかないが」と断りつつも『柳営婦女伝系』を用いて、將軍の生母の出自などに言及している<sup>54</sup>。高柳金芳は、將軍の妻妾について『柳営婦女伝系』・『玉輿記』など諸書を比較しながら、その記述の妥当性を検討し、それぞれの女性たちについて説明をしている<sup>55</sup>。山本博文も將軍の側室に言及するときに、『柳営婦女伝系』を利用している。ただし、山本も、その信憑性に疑問を差しはさみ、その内容が「本当の話かはわからない」とも述べている<sup>56</sup>。例えば、先述の家光の側室永光院が、老中の内意によつて懐胎を禁じられていたという記述が『柳営婦女

伝系』にはあるが、「將軍の意思から独立して、老中がそうしたことを大奥に行わせるだけの力があるはずがない」として、その当時の状況から類推して『柳営婦女伝系』の記述の批判をしている。

このように、これまでの研究は、將軍の正室・側室等について述べるときに、信頼すべき史料かどうかの危うさを意識しつつも、『柳営婦女伝系』に依拠してきた<sup>57</sup>。しかし、それがいつどのように成立したのかという点の解明を含む、本格的な史料批判は行われて来なかつたのである。

先述のように、『武家諫懲記後正』の「附録」には、將軍の正室や側室等にかかわる情報と、彼女らの評判が付けられていた。現存が確認されている『武家諫懲記後正』の「附録」は、六本あり、それを表1に整理した<sup>58</sup>。ここで表の見方を説明しておく、「所蔵機関」に続く「調査」欄は、「○」が調査済、空欄は未調査を示す。「―」は目録等に名前のみ伝わり、現存が確認できないものである。「写／刊」の欄には、写本・刊本の別を示した。現存するのは写本のみである。「冊数」には何冊あるか、「巻（順序）」にはその構成を示した。「旧蔵者」欄には、近世か

表 1 「將軍外戚御日記」調査一覧表

番号	書名	所蔵機関	調査 有	冊 数	巻 (順序)	序 (年記)	作者・書写者	旧蔵者	備考
1	攝關宮御縁外戚伝	長野県書館山王文庫	○	20	20巻	享保9年		上田村宗	
2	攝關宮御縁外戚	愛媛県立図書館	○	14	20巻	享保19年		治城公雄	
3	攝關宮御縁外戚	東京大学史料編纂所	○	1		明治24年写		松平輝雄	
4	武家譜御鑑訓縁	盛岡市中央公民館	○	16	17巻	寛保2年		盛岡藩御用家 廣島藩文書家	
5	武家譜御鑑訓縁	国控野宮書館	一	16				広島藩文書家	
6	攝關宮御縁御宮婦女伝	長崎大学附属図書館	○	18	18巻自加	享保2年(寛保4年自加)	文藝斎		
7	將軍外戚伝	盛岡市中央公民館南部	○	21	20巻自加				
8	將軍家外戚伝	住吉文相御文庫		6					
9	故選外戚伝	名古屋市蓬左文庫鶴江		6	6巻				欠巻1 / 「田元直印 字子良」の印。
10	徳山外戚伝	田三井醫館		1					
11	徳山外戚伝	仙台伊達家 岩手大学		4					
12	外戚伝(子伝御内御系譜)	舞鶴市茶井文庫		1					
13	系譜外戚伝	小浜市立図書館西井		2	6巻			手塚氏	
14	系譜御文庫之内御外戚伝(本家系譜)	舞鶴市茶井文庫	○	1				宮津藤本狂家	
15	御当家御外戚伝	国立国会図書館(桜園蔵 書六五)	○	1	2巻			景耀手写	
16	御宮婦女伝系	国立国会図書館	○	8	17巻自加				
17	御宮婦女伝系	国立公文書館外親文庫	○	5	17巻自加			和学藤原研	
18	御宮婦女伝系	国立公文書館外親文庫	○	18	17巻自加	明治8年写		岡名繁貴	
19	御宮婦女伝系	国立公文書館外親文庫	○	5	17巻自加				
20	御宮婦女伝系	静嘉堂文庫		3					
21	御宮婦女伝系	静嘉堂文庫		2	17巻				
22	御宮婦女伝系	静嘉堂文庫		3	3巻				
23	御宮婦女伝系	宮内庁書陵部		18					
24	御宮婦女伝系	宮内庁書陵部		5					
25	御宮婦女伝系	東京国立博物館		5					
26	御宮婦女伝系	京都大学附属図書館	○	6	17巻			大野屋惣八	

27	312	柳宮婦女伝系	筑波大学附属図書館		写	6	6巻						
28	313	柳宮婦女伝系	慶応大学		写	1							
29	314	柳宮婦女伝系	早稲田大学		○写	11	18巻(追加)						
30	315	柳宮婦女伝系	早稲田大学		○写	1	17巻のみ						
31	316	柳宮婦女伝系	東京大学附属図書館		○写	6	17巻(複製)					南條文庫	
32	317	柳宮婦女伝系	東京大学附属図書館		○写	1	17巻					坂井龍彦	
33	318	柳宮婦女伝系	東北大学理学文庫		○写	17	17巻(追加)						
34	319	柳宮婦女伝系	東北大学理学文庫		○写	1	3巻						
35	320	柳宮婦女伝系	静岡県立図書館蔵文庫		○写	5	18巻						外題「柳宮婦女伝 柳宮秘鑑」
36	321	柳宮婦女伝系	秋田県立図書館		写	5	5巻						1冊文本
37	322	柳宮婦女伝系	大阪府立中之島図書館		写	5							
38	323	柳宮婦女伝系	東京都立中央図書館		○写	4	17巻						外題「柳宮秘鑑婦伝」
39	324	柳宮婦女伝系	足利学芸館蔵図書館		写	15	17巻						
40	325	柳宮婦女伝系	名古屋市蓬左文庫		写	18	17巻(追加)						
41	326	柳宮婦女伝系	名古屋市蓬左文庫		写	7	17巻(追加)						
42	327	柳宮婦女伝系	大橋図書館		写	1							寛延3年写
43	328	柳宮婦女伝系	神宮文庫		写	5							
44	329	柳宮婦女伝系	旧浅野図書館		写	13							
45	330	柳宮婦女伝系	旧浅野図書館		写	8	18巻						広島藩蔵書家
46	331	柳宮婦女伝系	旧彰考館文庫		写	21							広島藩蔵書家
47	332	柳宮婦女伝系	旧彰考館文庫		写	5							水戸藩徳川家
48	333	柳宮婦女伝系	筑波大学附属図書館		○写	6	13巻						
49	334	柳宮婦女伝系	金沢大北条		写	10							
50	335	柳宮婦女伝系	小浜市立図書館西井		写	2	2巻						
51	336	柳宮婦女伝系	熊本大学永青文庫		写	13							熊本藩徳川家
52	337	柳宮婦女伝系	東京家蔵大学附属図書館 大江文庫		写	8	17巻						
53	338	柳宮婦女伝系	トイツ／D／SBB		写	7							
54	339	柳宮婦女伝系	四天王寺大恩頼		写	2	17巻						土岐源朝 墓
55	340	柳宮婦女伝系	大阪市立大学丸森		○写	8	8巻						森文庫

56	341	柳宮婦女伝系	萩市図書館		写	5			
57	342	柳宮婦女伝	熊本大学永青文庫		写	3		熊本藩御山家	
58	343	柳宮婦女伝	秋田県立図書館		写	1		大槻玄沢 写	
59	344	柳宮婦女伝	中津市		写	518巻		土岐朝豪 編	
60	345	柳宮婦女伝	静岡県立図書館蔵文庫	○	写	517巻			
61	346	柳宮婦女伝	京都大学附属図書館		写	21巻系図1巻			
62	347	柳宮婦女伝	明治大学図書館		写	1		黒山春村・真頼	
63	348	柳宮婦女伝略	国文学研究資料館		写	1		田安御山家	
64	349	柳宮婦女伝略	高知		写	1			
65	350	柳宮外殿婦女伝	国立公文書館附閣文庫	○	写	2018巻追加			
66	351	柳宮外殿婦女伝	国立公文書館附閣文庫	○	写	618巻追加			
67	352	柳宮外殿婦女伝	東京大学史料編纂所	○	写	618巻追加	大白4年写		
68	353	柳宮外殿婦女伝	早稲田大学	○	写	216巻			
69	354	柳宮外殿婦女伝	国文学研究資料館	○	写	11		田安徳山家	
70	355	柳宮外殿婦女伝	同志社大学小室文庫	○	写	618巻追加		熊本大久保忠常	
71	356	柳宮外殿婦女伝系	名古屋市蓬左文庫		写	818巻			
72	357	柳宮外殿伝	東京国立博物館		写				豊保写
73	401	将軍御外殿伝	国史館蔵書館	○	写	3巻			
74	402	将軍御外殿伝	国立公文書館附閣文庫	○	写	24巻			
75	403	将軍御外殿伝	大阪府立大学大森	○	写	35巻			
76	404	将軍御外殿伝	東京大学史料編纂所		写				
77	405	将軍御外殿伝	西尾市岩瀬文庫		写	1			
78	406	将軍御外殿伝	名古屋市蓬左文庫		写	66巻			江戸中期写
79	407	将軍御外殿伝	名古屋市蓬左文庫		写	3			
80	408	将軍御外殿伝	米沢図書館興健館文庫		写	1			
81	409	将軍御外殿伝	神宮文庫		写				
82	410	将軍御外殿伝	熊野会平沼		写	1			
83	411	将軍御外殿伝	目影考館文庫	—	写	2			
84	412	将軍御外殿伝	森沢文化寮		写	3		水戸藩徳山家	

85	413	将軍御外藏云	新井清政野	○	写	1	上巻						
86	414	将軍御外藏云	大阪市立大学蔵	○	写	3	6巻					泰文庫	
87	415	将軍御外藏云	津山郷土堂蔵		写	2							
88	416	将軍御外藏云	津山郷土堂蔵		写	5							
89	417	当将軍家外藏云	国立公文書館外閣文庫	○	写	4	4巻附録1巻					彦根藩御伊家	
90	418	当将軍家外藏云	北風館伊達文庫	○	写	4	4巻						
91	419	当将軍家外藏云	東北大学野文庫	○	写	4	4巻			宝暦9年			巻3末に「敬紀書」、朱書きで寛延元年仲秋「於寒気堂」隔井氏正言書写之」と宝暦9年8月「於口付城下」大澤氏藤節傳書写とあり。
92	420	公边御外藏云	日蓮宗文庫		写	6							
93	421	大御御外藏云	慶応大学		写								
94	422	徳川将軍御外藏云	東京大学附属図書館	○	写	5	6巻					屋代法賢一坂田恭遠	
95	423	御外藏云	小浜市立図書館西井		写	1	2巻			寛政5年写		長谷川包敷	
96	424	御外藏云	熊本大学永青文庫		写	5						熊本藩御川家	
97	425	御外藏云	熊本大学永青文庫		写	6						熊本藩御川家	
98	501	玉興日記	国立国会図書館	○	写	1	7巻					依子傳	
99	502	玉興日記	国立国会図書館	○	写	1	7巻						
100	503	玉興日記	宮外庁書録部		写								
101	504	玉興日記	大阪府立大学蔵	○	写	2	10巻					泰文庫	
102	505	玉興日記	京都大学附属図書館	○	写	1	10巻					大野理翁八	
103	506	玉興日記	東京大学附属図書館	○	写	1	1・2巻のみ					坂田助彦	
104	507	玉興日記	東京大学附属図書館	○	写	2	10巻						
105	508	玉興日記	熊野会神智		写	1	10巻						
106	509	玉興日記	八戸市立図書館	○	写	10	10巻						
107	510	玉興日記	茨城大学蔵	○	写	2	上下巻			文政12年写			
108	511	玉興日記	北野文庫蔵		写	5							
109	512	玉興日記	今谷田野美	○	写	5	10巻					西荘文庫	

調査欄の「○」は、目録等に記載されているのみで現存が確認できず、調査不能であることを示す。

ら近代にかけての所蔵者を記入した。

表の番号一〇〇番台の六本をみていただきたい。なんと「附録」に「柳営婦女伝」というタイトルを付けたものがある。別に「外戚伝」と称するものもある。『国書総目録』、その続編である『古典籍総合目録』で、この「外戚伝」・「柳営婦女伝」を調べてみると、多くの似たタイトルの写本が多数現存していることがわかった。表の二〇〇番台には『將軍外戚伝』、三〇〇番台に『柳営婦女伝系』、四〇〇番台『將軍御外戚伝』、五〇〇番台『玉輿記』をそれぞれ列挙した。その数は、現時点で一〇九本を数える。

詳しくは後述するが、内容は、諸本によって相異はあるものの、將軍にかかわる女性たちの情報と評判が書き綴られているという点で一致している。おおむね、家康の祖母華陽院についての記述からはじまり、九代將軍家重の正室か一〇代將軍家治の生母に関する記述で終わっている。正室・側室だけではなく、家光の乳母の春日局などの記載も含まれ、將軍に関した女性たちの系図と事績などが書かれている。

本稿では、これらの書物を総称して「大名評判記」

に対して、「將軍外戚評判記」と呼びたい。前述のように、これまで『柳営婦女伝系』に依拠して將軍の正室や側室等について叙述してきた。しかし、それを史料として利用とする前に、まずすべきことがある。すなわちその史料批判である。「將軍外戚評判記」の、それぞれの諸本が、誰によってどういう意図でいつ成立したのか、まったく分からない。作者、作成意図、成立時期等を、可能な限り明らかにする作業をしてから、史料として用いるべきである。

本稿は、そのための第一歩である。結論を先取りすれば、『武家諫懲記後正』の「附録」、『柳営婦女伝系』、『將軍外戚伝』、『將軍御外戚伝』、『玉輿記』が、実は密接に関連した、一連のものであることを明らかにしていきたいと考えている。本稿の課題である。

## 第一節 「將軍外戚評判記」と「大名評判記」

まず、『武家諫懲記後正』の「附録」の「外戚伝」と「柳営婦女伝」について検討していこう。

表1をみてみると、『武家諫懲記後正』の「附録」には、

「外戚伝」・「外戚」、「柳營婦女伝」という名称を付けているものと、ただ「附録」としてあるものがある<sup>90</sup>。一つひとつ見ていこう<sup>91</sup>。まず、長野県立図書館所蔵の「外戚伝」（長野本）と愛媛県立図書館所蔵の「外戚」（愛媛本）とを比較する。長野本の『武家諫懲記後正』には、次のような序がある。

〔史料1〕 長野本

密編輯総計九十九巻為全部、改諫懲記後正、且將軍外戚伝二十一巻附録之、総計百廿余巻、不世売買、以慰老眼、妄不許出闕外、深秘治文庫、于時享保十乙巳年編集、同十九甲寅春再補筆、令參考改正者也

享保一〇年（一七二五）に編集し、その後、享保一九年に補筆を行なったとある。愛媛本の序では、編集年を享保一一年として一年の食い違いがあるが、補筆の年は同じである。

長野本の「外戚伝」の構成を示したのが、表2である。

「東照宮御祖母」のことからはじまり、九代將軍家重の正室である「比宮御傳系并安宮真宮御由緒之事」で終わ

っている。一方、愛媛本では、表3のように、長野本の華陽院の後に見られる「大橋氏」の系図から記され、「紀伊大納言光貞卿御母堂系」まで記載されている。長野本と愛媛本では、記載されている人物の順番の違いがある。また愛媛本には三代將軍家光の正室本理院がないなど記事の脱漏があることもわかる。

実際に、記載されている人物の事績を比較してみると、八代將軍吉宗の生母浄円院の弟巨勢十左衛門の場合、長野本では次のようにある。

〔史料2〕 長野本

往昔下京二在任シ、後奉仕紀州家、浄円院君江戸下向ノ時、随從勤仕幕府領五千石御側衆ノ上座ナリ、病死

巨勢十左衛門は、下京に住んでいたが、浄円院が江戸に行く時に随い、五千石の幕臣となり、側衆の上座になったとある。同じ人物について、愛媛本を見てみよう。

〔史料3〕 愛媛本

往昔卑賤ノ人ニシテ京都住居湯屋ナリシカ、姉浄円院殿



表2 長野本『謙懲記附録外戚傳』（長野県立図書館丸山本文庫所蔵）の構成

巻		
1	東照宮御祖母 清康君御内家伝系	大猷公御寵女於萬之事 永光院由緒之事 13 戸田氏伝系之事
2	贈大納言広忠君御母堂由緒之事 清康君御室家広忠君御室家継伝之事 清康君御継室東照宮御外祖母伝通院御母堂之事 華陽院殿御由緒伝系之事 大橋氏伝系之事 大河内氏伝系之事 宮氏伝系之事	東福門院御母代称神尾一位局之事 雲光院由緒伝系之事 会津左中将正之御母堂之事 14 浄光院殿御由緒之事 千代姫君御母堂称於振方之事 自証院殿御由緒之事 岡氏岡田氏伝系之事 町野氏伝系之事
3	東照宮御母堂伝通院殿御由緒之事 伝通院殿并華陽院殿御由緒伝系之事 伝通院殿再嫁久松氏御由緒伝系之事	嚴有公御母公之事 宝樹院殿御由緒之事 増山氏伝系之事
4	岡崎三郎信康君御母堂称築山殿之事 清池院殿御由緒伝系之事 今川氏伝系之事 瀬名氏伝系之事	15 嚴有公御乳母之事 矢嶋局由緒之事 甲府宰相綱重御御母堂之事 順性院殿御由緒伝系之事
5	清池院殿妹嫁牟禮氏伝系之事 東照宮御君御女子生母伝系之事 越前中納言秀康御御母堂称小督局之事 長勝院殿御由緒之事	常憲公御母公之事 桂昌院殿御由緒伝系之事 遠藤氏由緒伝系之事 大澤氏伝系之事
6	結城秀康御御室家御由緒之事 台徳院公御母堂称西郷局之事 宝台院殿御由緒之事 服部氏伝系之事 戸塚氏伝系之事	16 桂昌院殿御嬬之事 瑞光院殿由緒伝系 快楽院由緒之事 桂昌院殿御姪之事 香桂院殿由緒之事 六角氏伝系之事
7	台徳公御乳母称大姥由緒伝系之事 武田七郎信吉君御母堂称下山殿之事 長慶院殿御由緒之事	17 常憲公御寵女之事 寿光院殿御由緒之事 清閑寺家伝系之事 常憲公御代局之事 右衛門佐局由緒之事 水無瀬家伝系之事
8	長慶院殿姉信松院由緒之事 信吉君御室家由緒之事 越後少将上総介忠輝君御母堂称阿茶局之事 朝覚院殿御由緒伝系之事	18 鶴姫君徳松君御母堂五丸殿又三丸殿之事 瑞春院殿御由緒之事 文昭公御母公之事 長昌院殿御由緒伝系之事
9	尾張大納言 <small>義光</small> 義光御母堂之事 相応院殿御由緒伝系之事 竹腰氏伝系之事	19 文昭公大夫人之事 天英院殿御伝系之事 文昭公御寵女之事 蓮浄院殿御伝系之事 家千代君御母堂之事 法心院殿御伝系之事
10	紀伊中納言頼宣卿水戸中納言頼房卿御母堂之事 養珠院殿御由緒伝系之事 蔭山氏伝系之事 水戸黄門頼房卿御養母之事 英勝院殿御由緒之事 大猷公御母堂之事 崇源院殿御由緒之事	20 有章公御母公之事 月光院殿御由緒伝系之事 今大君吉宗公御母堂之事 浄門院殿御伝系之事 従三位権大納言家重公御尊母之事 深徳院殿御伝系之事 家重公御簾中之事
11	大猷公御乳母称春日局之事 麟祥院由緒伝系之事 稲葉氏伝系之事	比宮御伝系并安宮真宮御由緒之事
12	天樹院殿御局之事 松坂局由緒之事 大猷公婦人中丸殿之事 本理院殿御由緒伝系之事 甲府宰相綱重卿御簾中之事 紅然院殿御由緒伝系之事 常憲公大夫人之事 浄光院殿御由緒伝系之事 水戸中納言吉孚卿御簾中之事 養仙院殿御由緒伝系之事	

表3 愛媛本『謙徳記後正附録外戚』（愛媛県立図書館所蔵）の構成

卷		附・并
1	大橋氏・大河内・長田・川口・永井・中根氏之事	并 青木氏・大河内・桃井・土岐・牧村等之事
2	大橋氏・岡本改宮氏家ノ紋青木氏、清康君・伝通院君之御名	并 御大井ノ方・久松弾正左衛門尉事
3	得川次郎三郎広忠公・水野右衛門太夫忠政之女伝通院	并 家康公御事
4	西郷弾正左衛門尉入道清海之事榮金	附り 久松佐度守之事
5	義直御母堂之事、志水甲斐守并義直御連枝之事、竹腰氏	并 親貞伝通院御母公之事 附 家ノ紋、紀伊頼宣公・水戸黄門頼房御母堂
6	嚴有公御母宝宝樹院殿之御事、増山氏	并 証木氏之事 并 家門清宗後称雲清 附り 女子大幸之次第
7	神尾氏飯田筑後守并部頼旧属始中終之事	附り 系譜之事
8	崇源院殿并浅井長政太閤秀吉公秀頼公之御母淀殿之事、茶阿局之由緒之始終忠輝花井氏之事 大神君御君達御女子方ノ御事	
9		并 岡崎三郎信康御母上之御事
10	瀬名氏家ノ紋	并 牟礼氏ノ事
11	大樹家綱公御母堂之御事	并 由緒系譜
12	会津左中将正之御母堂之事、小屋氏・白須氏、寿光院由緒家伝、竹姫君之由緒熙房卿之事	并 常憲院殿御局右衛門佐 并 桃井氏由緒系譜、水無瀬氏等之事
13	台徳院殿御母堂・宝樹院御実母方服部氏之事	并 戸塚氏、台徳公御乳大姥事岡部氏之由緒家譜之事
14	森氏由緒之事	
15	大樹綱吉公御母公之御事	并 本庄氏後称賜松平氏事
16	大將軍家宣公御外戚田中氏之事	
17	越智之由緒、国学講堂芦林家之儒官詩文	并 清武雅安氏誌之事
18	千代姫君御母堂之事	并 岡氏・岡田氏・町野氏・藤枝氏等之事
19	勝田氏林昌軒之事	
20	大樹家継公御母堂之御事	并 吉宗公御母堂巨勢氏御若君様方之御事

依大幸而、紀州ニ於テ被召始テ出三百石ヲ賜フ、其後段々御取立有テ、後將軍吉宗公御代替之後、紀州ヨリ御本丸ニ被召出、千石ヲ賜フ、叙從五位下任丹波守、御側衆座上ニ列居、享保年月日頓死

巨勢十左衛門は、京都で湯屋を営んでいたが、浄円院が吉宗を産んだので、紀州藩に三〇〇石で召出された。それ以降も取立があつて、吉宗が將軍になった時には、紀州藩から幕府の小納戸となり、千石の知行になり、從五位の丹波守に任ぜられたとある。

この例では両本の内容はかなり異なる。しかし、次の事例をみていただきたい。

〔史料4〕 長野本

元禄十年丁丑十二月廿二日叙從五位下任日向守、同十五年壬午六月日執前髪、宝永二年乙酉三月廿三日父子三人賜松平氏改称松平美作守、早世

〔史料5〕 愛媛本

元禄十年丁丑十二月廿二日叙從五位下任日向守、同十五

年壬午六月日執前髪、宝永二年乙酉三月廿三日父子三人  
賜松平氏改称松平美作守、早世

これは、五代將軍綱吉の生母桂昌院の甥の子である本  
庄宗信に關しての記述である。両本がまったく同文であ  
ることがわかる。元禄一〇年（一六九七）に従五位の日  
向守となり、元禄一五年に元服をした。宝永二年（一七  
〇五）には、父子三人で松平氏に改めることを許され、  
松平美作守を名乗ったが、早世したとある。

このように両本には内容及び文章が共通している部分  
があり影響關係を確認することができる。しかしながら、  
どちらかにしかいない人物がいたり、内容や文章が異な  
る箇所もあることから、両本は、異なる系統の本である  
と位置付けることができる。

続いて盛岡市中央公民館所蔵の『武家諫懲記後正』の  
「附録」（盛岡本）について検討していこう。盛岡本には  
次の序がある。

〔史料6〕 盛岡本

密編輯總計九十九卷為全部、改諫懲記後正一、且將軍外

威伝二十卷附録之、總計合百廿余卷、不<sub>レ</sub>世売買一、以慰  
老眼、妄不<sub>レ</sub>許<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>國外<sub>一</sub>、深秘治<sub>二</sub>文庫<sub>一</sub>、于<sub>レ</sub>時享保  
十一丙午年初秋下旬成<sub>レ</sub>功、然經<sub>二</sub>九ヶ年<sub>一</sub>、而諸家悉有<sub>二</sub>  
異變<sub>一</sub>、仍而同十九寅年新加筆而增<sub>二</sub>補之<sub>一</sub>、亦經<sub>二</sub>九箇年<sub>一</sub>  
一、家々變數多、故不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>止、寛保<sub>二</sub>壬戌年再加筆而改<sub>レ</sub>  
之、然予老命向<sub>二</sub>朝夕<sub>一</sub>終後所<sub>レ</sub>秘之聞<sub>二</sub>文庫<sub>一</sub>而見<sub>レ</sub>之者、  
可<sub>レ</sub>補<sub>二</sub>向來之違變<sub>一</sub>而已。<sup>(11)</sup>

『諫懲記後正』を改めて、『將軍外威伝』を「附録」  
として付けて、一二〇冊とし享保一一年に完成した。享  
保一九年には加筆・増補し、さらに寛保二年（二七四二）  
に再び加筆をしたという。さて、この盛岡本「附録」の  
目次をまとめたものが表4である。これを長野本、愛媛  
本と較べると、その構成は両本とも違う。では、内容も  
異なるのであろうか。

次にあげたのは、盛岡本の巨勢十左衛門に關する部分  
の記述である。

〔史料7〕 盛岡本

往昔八卑賤ニ下京ニ在住ス、淨円院君江戸下向ノ時、

表4 盛岡本『武家謙懲記附録』（岩手市立盛岡中央公民館所蔵）の構成

巻		附・并
1	東照宮御祖母 清康君御内家伝系 贈大納言広忠君御母堂由緒	附 清康君御室家広忠君御室家継伝
2	清康君御継室東照宮御外祖母之事 華陽院殿御由緒伝 東照宮御母堂 伝通院殿御由緒	附 大橋氏伝系・大河内氏伝系・宮氏伝系
3上	傳通院殿并華陽院殿御由緒伝系 傳通院殿再嫁久松氏御由緒傳系 岡崎三郎信康君御母堂称築山殿 清池院殿御由緒伝系	
3下	清池院殿御養父 今川氏伝系 東照宮御君達御女子生母伝系	附 瀬名氏伝系・清池院殿妹嫁牟礼氏伝系
4	越前中納言孝康卿御母堂称小督局 長勝院殿御由緒 結城秀康卿御室家御由緒 台徳院公御母堂称西郷局 宝台院殿御由緒	附 服部氏伝系・戸塚氏伝系
5	台徳公御乳母称大老由緒伝系 長慶院殿御由緒	附 長慶院殿姉信松院由緒
6	信吉君室家由緒 越後少将上総介忠輝君御母堂阿茶局 朝覚院殿御由緒伝系	
7上	尾張大納言義直卿御母堂 相応院殿御由緒伝系 紀伊大納言頼宣卿・水戸中納言頼房卿御母堂 養珠院殿御由緒伝	附 竹腰氏伝系
7下		養珠院殿御実父 正木家伝系 養生印殿御養父 蔭山氏伝系
8	水戸黄門頼房卿御養母 英勝院殿御由緒 大猷公御母堂 崇源院殿御由緒	
9	大猷公御乳母称春日局 麟祥院由緒伝系 天樹院殿御局 松坂局由緒	附 稲葉氏伝系・明智氏伝系
10	大猷公大夫人中丸殿 本理院殿御由緒伝系 大猷公御寵女於万万 永光院由緒	并 甲府宰相綱重卿御簾中 紅然院殿御由緒伝系 并 常憲公大夫人 浄光院殿御由緒伝系 并 水戸中将吉字卿御室 養仙院殿御由緒伝系 附 戸田氏伝系
11	東福門院御母代称神尾一位局 雲光院由緒伝系 会津左中将正之御母堂 浄光院殿御由緒 千代姫君御母堂称於振ノ方 自証院殿御由緒	附 岡氏・岡田氏伝系・町野氏伝系
12	厳有公御母公 宝樹院殿御由緒 厳有公御乳母 矢嶋局由緒	附 増山氏伝系
13上	甲府宰相綱重卿御母堂 順性院殿御由緒伝系 常憲公御母公 桂昌院殿御由緒伝系	
13下		桂昌院殿御由緒 進藤氏伝系・大沢氏伝系・佐野氏伝系・興津氏伝系・森氏伝系・富田氏由緒
14	桂昌院殿御姉 瑞光院殿由緒伝系并誓願寺 桂昌院殿御姪 香桂院殿由緒 常憲公御寵女 寿光院殿御由緒	附 快樂院由緒 附 六角氏伝系 附 清閑寺家伝系
15	常憲公御代局 右衛門佐局由緒 鶴姫君・徳松君御母堂称五丸殿又三丸殿 瑞春院殿御由緒伝系	附 水無瀬氏家伝系
16	文昭公御母公 長昌院殿御由緒伝系 文昭公大夫人 天英院殿御伝系 家千代君御母堂 法心院殿御伝系 有章公御母公 月光院殿御由緒伝系	
17	今大君吉宗公御尊母 浄門院殿御伝系 家重公御尊母 深徳院殿御伝系 家重公御簾中 比宮御伝系并安宮・真宮御由緒	

随従勤仕幕府領五千石御側衆ノ上座ナリ、病死

これを史料2（長野本）・史料3（盛岡本）と比較すると、多少の語句の違いはあるものの、史料2（長野本）と内容であることがわかる。ここではいちいちあげないが、盛岡本は長野本と同じく本理院の記述があるなど人物の数、事績や系図でもほぼ一致しており、長野本「外戚伝」と同じ系統の書物であると確認できるのである。

次に、長崎大学附属図書館所蔵『武家諫懲記後正』の「柳営婦女伝」（長崎本）の検討に移ろう。まず、序であるが、実は盛岡本とほぼ同じ文章であり、寛保二年に再加筆したものだという。興味深いのは、長崎本には、序の末尾に「于時寛延四辛未年秋九月文豪齋自序」という文言が加わり、序を記した人物、『武家諫懲記後正』を享保から寛保にかけて十数年加筆し続けた人物が、「文豪齋」と名乗っていることが明らかとなった。

また、長崎本の「武家諫懲記後正惣目録」の末尾には次の記述がある。

〔史料8〕 長崎本

此外將軍様御代々之御台様方御由緒并御部屋様方・御若君様・御姫君様御誕生二付、此依大幸而、御親類様方御取立、御知行御拝領御由緒之次第迄、全部二十冊編集附録、都合百二拾余卷

將軍の正室の由緒、側室が將軍の子女を産むことは、「大幸」であるので、親類が取り立てられ、知行を与えられたなどのことについて二〇冊にまとめたと、「附録」の編集意図を述べている。これは他の四本の附録になく、長崎本のみにある。

さて、長崎本「柳営婦女伝」の構成を記したのが表5である。これを盛岡本（表4）と比較ればわかるように、両本の構成は酷似している。内容に関しても、同様に巨勢十左衛門でみてる。

〔史料9〕 長崎本

往昔八卑賤ニ下京ニ在住ス、淨円院君江戸下向ノ時、随従勤仕幕府領五千石御側衆ノ上座ナリ、病死

その記述は、史料7の盛岡本と同じである。他の箇所

表5 長崎本『謙懲記附録柳宮婦女伝』（長崎大学附属図書館所蔵）の構成

巻		附・并
1	東照宮御祖母清康君御内室伝系 広忠君御母堂由緒伝 清康君御継室伝	
2	東照宮御母堂伝通院殿之伝系 清康君御継室東照宮御外祖母之事 華陽院殿御由緒伝系 東照宮御母堂 伝通院殿御由緒伝	附 大橋氏伝系・大河内氏伝系・宮氏伝系
3上	伝通院殿 并華陽院殿御由緒伝系 伝通院殿再嫁久松氏伝系 岡崎三郎信康君御母堂 清地院殿御由緒伝系	
3下	今川氏伝系 瀬名氏伝系 清地院殿妹嫁牟礼氏伝系 長慶院殿御由緒伝	
4	結城秀康御室御由緒伝 台徳院殿御由緒伝	附 服部氏伝系・戸塚氏伝系
5	台徳公御乳母大姥岡部氏伝系 武田七郎信吉君御母堂 長慶院殿御由緒伝	附 長慶院殿姉信松院由緒伝
6	信吉君御内室伝 越後少将忠輝君御母堂 朝覚院殿御由緒伝系	
7	尾張義直卿御母堂 相応院殿御由緒伝系	附 竹腰氏伝系
8	紀伊頼宣・水戸頼房卿御母堂 養珠院殿御由緒伝系	附 蔭山氏伝系
9	水戸頼房卿御養母 英勝院殿御由緒伝 大猷公御母堂 崇源院殿御由緒伝系	
10	大猷公御乳母 麟祥院由緒伝系 天樹院殿御局 松坂局由緒伝	附 稲葉氏伝系・明智氏伝系
11	大猷公大夫人 本理院殿御由緒之伝	并 甲府綱重卿御簾中 紅然院殿御由緒之事 并 常憲院公大夫人 浄光院殿御由緒之事 并 水戸吉孚卿御室 養仙院殿御由緒之事 附 戸田氏伝系
12	大猷公御寵女 永光院由緒伝 東福門院御母代 雲光院由緒伝系 会津正之御母堂 浄光院殿御由緒伝 千代姫君御母堂 自証院殿御由緒伝	
13	敵有公御母堂 宝樹院殿御由緒伝	附 岡田氏・岡田氏伝系・町野氏伝系
14上	敵有公御乳母 矢嶋局由緒伝 甲府綱重卿御母堂 順性院殿御由緒伝	附 増山氏伝系
14下	常憲公御母公 桂昌院殿御由緒伝系 桂昌院殿御由緒瑞光院殿伝	附 進藤氏系・大澤氏系・佐野氏系・興津氏系・森氏系・冨田氏由緒伝
15	桂昌院殿御姉 瑞光院殿由緒伝 桂昌院殿御姪 香桂院殿由緒伝系 常憲公御寵女 寿光院殿御由緒伝	附 誓願寺并快樂院由緒 附 六角氏系 附 清閑寺家系
16	常憲公御代局 右衛門佐局由緒伝 鶴姫君・徳松君御母堂 瑞春院殿御由緒伝系	附 水無瀬家系
17	文昭公御母公 長昌院殿御由緒伝系 文昭公大夫人 天英院殿御伝系 文昭公御寵女 蓮浄院殿御伝系 家千代君御母堂 法心院殿御伝系 有章公御母公 月光院殿御由緒伝系	
18	吉宗公御尊母公 浄円院殿御伝系 家重公御尊母公 深徳院殿御伝系 家重公御簾中 比宮御伝系并安宮・真宮御由緒伝	伏見宮之系
追加	東照宮御公達姫君生母系説	

でも同様のことがいえ、長崎本と盛岡本は同系統であるといえる。

以上、四本の『武家諫懲記後正』の「附録」について検討してきた。その結果、『武家諫懲記後正』の「附録」は、大きく二つの系統に分けられることができる。長野本・盛岡本・長崎本の系統と、愛媛本の系統である。前者は、長野本と、盛岡本・長崎本の二系統に分類できる。

それでは、この「附録」は、表1の二〇〇番台以降の「將軍外戚評判記」とは如何なる関係にあるのだろうか。

## 第二節 ひろがる「將軍外戚評判記」

### 1 『將軍外戚伝』

二〇〇番台の『將軍外戚伝』の書名には、実際に原物を調査してみると『將軍外戚伝』・『御当家外戚伝』などさまざまある。現時点では、未調査の部分もあるが、未調査のものは、『国書総目録』及び『古典籍総合目録』で取られている書名に依った。「御」の有無で、二〇〇番台の『將軍外戚伝』と四〇〇番台の『將軍御外戚伝』にとりあえず分けた。

『將軍外戚伝』の場合でも、先述と同様に巨勢十左衛門の記述で検討していく。

### 〔史料10〕

往昔ハ卑賤ニゲ下京ノ商人タリ、淨円院君江戸下向ノ時、随従勤仕幕府領五千石御側衆ノ上座ナリ、病死

史料10は、二〇一『將軍外戚伝』（盛岡市中央公民館所蔵）からである。記述が、史料7（盛岡本）と似ていることが分かる。二〇一『將軍外戚伝』は、本庄宗信の部分でも史料4などとその記述内容は干支が省かれている点は若干違うが、他の部分は同様である。構成も「東照宮御祖父清康君御内室之御事」からはじまり、「竹千代君御尊母御由緒之事」と家治の生母のことで終わっており、盛岡本・長崎本の『武家諫懲記後正』の「附録」に書かれている女性たちと類似している。

このように、『將軍外戚伝』は、盛岡本・長崎本の系統の『武家諫懲記後正』の「附録」とは強い影響関係があることが判明した。

## 2 『柳営婦女伝系』

『柳営婦女伝系』は、表1の三〇〇番台の書物である。五七本を数え、「將軍外戚評判記」の中では、数が最も多い。ここでも、巨勢十左衛門の部分で、諸本との関係を見てみよう。

〔史料1-1〕

往昔ハ卑賤ニズ下京ノ湯屋タリ、浄田院君江戸下向ノ時、随従勤仕幕府領五千石御側衆ノ上座ナリ、病死

史料1-1は、二一六番の東京大学附属図書館の所蔵本からである。湯屋をしていたという記述があり、少し詳しくなっているが、基本的な部分では史料7（盛岡本）と同じであり、『武家諫懲記後正』の「附録」の盛岡本の系統と、『柳営婦女伝系』との強い影響関係が想定できる。三〇〇番台の『柳営婦女伝系』の構成は、三〇二番の国立公文書館内閣文庫所蔵本では、「東照宮御祖父清康君御内室華陽院殿之伝系」と家康の祖父清康の室である華陽院からはじまり、「大納言家治君御母堂梅溪氏系」と一〇代將軍家治の生母の梅溪氏の系譜で終わっている。他の

『柳営婦女伝系』の多くも構成は同様であり、盛岡本系統の「附録」と三〇〇番台の『柳営婦女伝系』の影響関係があるといえよう。

なお、『柳営外戚婦女伝』という書名の本がある（表1の三五〇〜三五七番）。これは、構成と内容ともに『柳営婦女伝系』からの影響関係があり、その記述の下限は、現在調査済の「將軍外戚評判記」の内では、最も時代が下り、一〇代將軍家治の子である松平貞治郎の母「於志奈之方由緒」までである。

また、『柳営婦女伝系』には、『柳営秘鑑』の附録となっているものがある。三二〇・三二三番の『柳営婦女伝系』である。『柳営秘鑑』とは、徳川幕府年中の礼式、殿中尊卑の格例、諸侯伯上下諸士諸吏の勤法等の事実を記録したものである<sup>12)</sup>。菊池弥門なる人物によって書かれ、『後編柳営秘鑑』、『拾遺柳営秘鑑』、『残集柳営秘鑑』、『柳営秘鑑脱漏』、『新益柳営秘鑑』、『温知柳営秘鑑』と続く書物である。三二〇葵文庫本では、内題は「柳営婦女伝」であり、外題は「婦女伝 柳営秘鑑」となっている。三二三都立中央図書館本では、内題は「柳営婦女伝系」であり、外題は「柳営秘鑑婦伝」となっている。しかし、



全ての『柳営秘鑑』に附録として『柳営婦女伝系』が付  
けられていることはなく、この二本だけが確認でき、『柳  
営秘鑑』の附録として『柳営婦女伝系』が成立した可能  
性は少ないと考えられる<sup>(43)</sup>。実は、『柳営婦女伝系』の著  
者について、従来『柳営秘鑑』と同様に菊池弥門である  
とされている<sup>(44)</sup>。しかし、右に述べたように、『柳営秘鑑』  
の附録として成立した可能性が少ない以上、菊池弥門説  
は退けざるを得ない。なお著者については、三四〇・三  
四四番の『柳営婦女伝系』には「土岐朝豪」の名があが  
り、前述の長崎本『武家諫懲記後正』の「柳営婦女伝」  
には「文蒙斎」であるとす。ただし、いずれの人物も  
来歴などは不明である。

以上みてきたように、『柳営婦女伝系』は、『武家諫懲  
記後正』の「附録」、とりわけ盛岡本系統と強い影響関係  
があったことが判明した。

### 3 『將軍御外戚伝』

次に四〇〇番台の『將軍御外戚伝』の系統を検討して  
いく。ここでも同様に巨勢十左衛門の記述で検討してい  
く。四二二番の東京大学附属図書館所蔵『徳川將軍御外

戚伝』では、次の通りである。

〔史料12〕

往昔ハ卑賤ノ人ニテ京都ニ居住湯屋成シカ、姉浄円院殿  
ノ大幸ニ依テ紀州へ被 召出賜三百石、其後改々有御取  
立、吉宗公御代代替之翌年自紀州江戸へ被召出、賜五千  
石、叙從五位下任丹波守、列ス御側衆座上、享保享保年  
月頓死

用字などで違う部分もあるが、その内容は、史料3の  
愛媛本と同じ内容である。本庄宗信についての記述も、  
史料4・5と同じである。愛媛本『武家勸懲記後正』の  
「附録」からの影響が確認できる。

四〇〇番台の『將軍御外戚伝』と他のものと最も大き  
な違いは、『將軍御外戚伝』・『柳営婦女伝系』では、將軍の  
正室・側室などの事績についての記述の後ろに、多くの  
場合その女性の系図が付されているが、『將軍御外戚伝』  
では、女性の事績についてだけは書かれず、女性の家の  
系図のみが記載されている点である<sup>(45)</sup>。例えば、五代將軍  
綱吉の生母桂昌院の場合では、『將軍御外戚伝』では、桂

昌院の先祖である本庄宗孝からはじまる系図の記述から書かれているが、『將軍外戚伝』・『柳宮婦女伝系』では、桂昌院の誕生の様子など桂昌院自身の記述からはじまり、その後には本庄宗孝以降の系図が記載されている。

なお、愛媛本『武家諫懲記後正』の「附録」の構成は、異例のものであり、他の『將軍御外戚伝』の諸本は「參州岡崎之城由來之事、西郷彈正左衛門調頼系譜」からはじまっており、「紀伊垂相光貞卿御母堂之事」で終わるのが通常である<sup>(10)</sup>。愛媛本のように「大橋氏」の系図からはじまり、「大樹家継公御母堂之御事」で終わることはない。つまり、愛媛本は、他の『將軍御外戚伝』との系統とは記載されている女性の数や順序に違いなどがあるのである。『將軍御外戚伝』は、愛媛本以外とは違う構成の系統のものが広く流布していた。だが、両系統は、史料12でみたようにそれぞれの人物の事績の記述内容には大差はないのである。

#### 4 『玉輿記』

最後に『玉輿記』を検討しよう。八戸市立図書館所蔵の五〇九『玉輿記』の目次から表6を作成した。『玉輿記』

も他の「將軍外戚評判記」と同じように家康の祖父清康の室からはじまり、九代將軍家重の生母のことで終わっている。違うのは、それぞれの女性の事績ことが中心であり、外戚の系図は書かれていない点である。まさに玉の輿にのつた女性だけを記したということであろうか。内容は、他の「將軍外戚評判記」と極めて似ている。例えば、桂昌院の部分でみてみよう。

#### 〔史料13〕

桂昌院殿者、其始於玉と云し時、六条宰相有純卿息女於梅の方の縁を以京都夕江戸へ來り、大猷公御代に春日の局諸事を指南し、御側へ召出され、秋野と名を称す、然るに正保三年丙戌正月八日徳松君を産し奉り、徳松君其後館林宰相綱吉君と称し奉りし時、桂昌院殿にも館林御殿に御住居の処、延宝八年庚申五月八日將軍家綱公薨去二付、館林宰相君不慮に御養君と被為成、御代の相続有し時、桂昌院殿にも江城三の丸に御移り有、御代に御外族多しといへとも、桂昌院殿の如くなる御仁惠深きは又類ひすくなし、本庄家の御一族悉く御取立有て、いづれも高位・采地を授く、其門楣を第一大仏神を甚御信仰有

表6 『玉輿記』（八戸市立図書館所蔵）の構成

巻		附・并
1	東照宮御祖母清康君御内室 華陽院殿伝系	并 久松氏の事
	岡崎三郎信康君御母堂築山殿 清池院殿伝系	并 瀬名氏・牟礼氏の事
2	越前中納言秀康公御母堂小督局 長勝院殿伝系	
	結城秀康公御室御室家の伝	
	台徳君御母堂西郷局 宝台院殿伝系	并 青山図書介・服部忠右衛門・養笠之助の事
	台徳君御乳母大姥の伝系	并 岡部家由緒之事
	武田信吉御母堂下山殿 長慶院殿御由緒伝系	
3	信吉御室家木下勝俊御由緒	
	越後少将上総介忠輝公御母堂 朝光院殿伝系	并 忠輝公御配流之事
		附 花井氏の事
4	尾張大納言義直公御母堂 相応院殿伝系	并 志水甲斐守先祖由緒の事・竹腰山城守先祖由緒の事
	紀伊大納言頼宣公・水戸中納言頼房公御母堂 養珠院殿伝系	并 正木氏・蔭山氏御由緒之事
5	会津左中将正之御母堂 浄光院殿伝系	
	大猷君御乳母 春日局伝系	并 斉藤家・稲葉家・堀田家の事
6	大猷君大夫人中之丸殿 本理院殿伝系	
	甲府綱重君御簾中 紅竜院殿伝系	附 松平左兵衛督信平家の事
	千代姫君御母堂 自証院殿伝系	并 千代姫君尾州江御入興の事
7		附 岡氏・町野氏の事
	嚴有君御母堂 宝樹院殿伝系	并 朝倉家・増山氏・那須氏・平野氏の事
8	嚴有君御乳母 矢嶋局伝系	
	常憲君御母堂 桂昌院殿伝系	并 本庄氏・六角氏・大沢氏・進藤氏・興津氏・富田氏・佐野氏・森氏の事
9	桂昌院殿御妹君 瑞光院殿伝系	并 誓願寺・快樂院御由緒の事
	鶴姫君・徳松君御母堂 瑞春院殿伝系	
10	常憲院殿御代 右衛門左局伝系	
	同御愛女 寿光院殿伝系	
	文昭君御母堂 長昌院殿伝系	
	文昭君大夫人 天英院殿伝系	
	有章君御母堂 月光院殿伝系	
	文昭君御愛女 蓮浄院殿伝系	
	家千代君御母堂 法心院殿伝系	
	有徳君御母堂 浄円院殿伝系	
家重君御母堂 深徳院殿伝系		

て、諸寺諸山神社仏宇夥敷御再興あり、元禄十五年壬午二月十一日従一位に御昇進有

これは五〇七『玉輿記』（東京大学附属図書館所蔵）のものである。桂昌院が京都から江戸へ来て以降の記述である。桂昌院は、春日局の指南によつて家光の側に召出され、正保二年（一六四五）にのちの五代將軍綱吉である徳松を産んだ。綱吉は、兄家綱の死によつて將軍となり、桂昌院も江戸城に入り、貞享二年（一六八五）には従三位に任じられた。この中で、桂昌院は、「御仁恵深キハ又類ヒ鮮シ」と評され、これは本庄家だけではなく、その他の一族も取立てたことからであった。信仰も厚く、諸寺諸山の再興をし、元禄一五年には従一位に任ぜられた。

次に長野本『武家諫懲記後正』の「附録」の記述をみる。

〔史料14〕

桂昌院殿、其始メ於玉ト云シ時、六条宰相有純卿ノ息女於梅ノ方ノ縁ヲ以テ京都ヨリ江戸へ来リ、大猷公ノ御代

二春日局諸事ヲ指南シ、御側へ被召出、秋野ト名ヲ称ス、然ルニ正保三年丙戌正月八日徳松君常憲公御事也ヲ産シ奉リ、徳松君其後館林宰相綱吉君ト称シ奉リシ時、桂昌院殿ニ毛館林御殿ニ御住居ノ処、延宝八年庚申五月八日將軍家綱公薨去ニ付、館林宰相君不慮ニ御養君ニ被為成、御世御相続有リシ時、桂昌院殿ニ毛江城三丸ニ御移リ有、其後貞享二年乙丑年從三位ニ叙セラレ、御代ニ御外族多シト云ヘト、桂昌院殿ノ如クナル御仁惠深キハ又類ヒ鮮ク御取立有テ、何レモ高位・采地ヲ授ク其門楣ヲ大ニス、第一仏神ニ甚タ御信仰有テ、諸寺諸山神社仏容ヲ夥ク御再興アリ、元禄十五年壬午二月十一日從一位ニ御昇進アリ

一見して分かるように「附録」と『玉輿記』の内容の大部分は同じである。相違点は、傍線部であり、桂昌院が、貞享二年に從三位に任じられたこと、本庄家以外の「御縁類・御縁族」が取り立てられたという記述が『玉輿記』にはないことである。さらに、『玉輿記』は、史料14でみた『將軍外戚伝』の系統だけでなく、他の「將

軍外戚評判記」である『柳営婦女伝系』の系統なども記述はかなり似ており、『玉輿記』とその他の「將軍外戚評判記」の記述は影響関係があったことが分かる。

なお、この『玉輿記』と『柳営婦女伝系』の関係は、先述の高柳も同様に言及している。<sup>(17)</sup> 五〇五大惣本の外題には「柳営婦女伝抜粹」ともある。この両本の詳細な関係は今後の課題である。

このように『玉輿記』は、『將軍外戚伝』や『柳営婦女伝系』といった「將軍外戚評判記」と影響関係がみられたのであつた。

#### おわりに

以上、「將軍外戚評判記」について検討してきた。まず、『武家諫懲記後正』の「附録」である一〇〇番台の四本には相互に影響関係があることが確認できた(一〇三・一〇五番は先述の通り検討外)。さらに、『武家諫懲記後正』の「附録」は、それ以外の単独で存在する『將軍外戚伝』・『柳営婦女伝系』・『將軍御外戚伝』と、それぞれ影響関係があることが判明した、それだけではなく、『將

軍外戚伝』・『柳営婦女伝系』・『將軍御外戚伝』にも相互に影響関係があることが分かった。そして、『玉輿記』にもそれらの書物の影響関係は及んでいた。

このように様々な形態で表われた將軍家の外戚に関する書物である「將軍外戚評判記」は、表1にあるように一八世紀以降広く普及していった。大名家だけではなく、幕臣の蔵書にもみられ流布していった。しかも、それは一種類だけではなく、その記載を改め、広がつていったのが特徴である。江戸幕府瓦解後にも写本は作られていった。このように広くひろまったこれらの書物の受容を考えることは、重要であろう。

本稿では、こうした「將軍外戚評判記」が一連のものであることは指摘できたが、それぞれの書物が相互にどのような関係にあるのか、については十分に解明できなかった。『武家勸懲記後正』の「附録」として成立したのが先なのか。あるいは『將軍外戚伝』、『柳営婦女伝系』などが、それぞれ単独の書物として成立した後には、『武家勸懲記後正』の「附録」に取り込まれたのか、についても決定的な証拠はいまだない<sup>(8)</sup>。まずは全国に残る「將軍外戚評判記」の悉皆調査を行い、諸本の関係を位置づけ

たいと思う。また、たとえば同じ『柳営婦女伝系』でも、本によって記述内容が違う部分があり、それぞれの中の諸本の詳しい関係を検討していきたい。今後の課題である。

#### 【注】

- (1) 一〇一『諫懲記附録外戚伝』（長野県立図書館所蔵）。
- (2) 「大名評判記」については、『土芥寇讎記』の基礎的研究（研究代表者若尾政希、二〇〇四年）、『大名評判記』の基礎的研究（研究代表者若尾政希、二〇〇六年）、『大名評判記』の基礎的研究Ⅱ（研究代表者若尾政希、二〇〇七年）を参照のこと。
- (3) 早川純三郎編『柳営婦女伝叢』（国書刊行会、一九一七）。「柳営婦女伝系」・『玉輿記』は、高柳金芳『史料 徳川夫人伝』（人物往来社、一九六七年）にも収録。『柳営婦女伝系』は、『徳川諸家系譜 第一』（続群書類従完成会、一九七〇年）にも収録。
- (4) 齋木一馬「徳川將軍生母並びに妻妾考」（日本歴史学会編『歴史と人物』吉川弘文館、一九六四年）。
- (5) 高柳金芳『徳川妻妾記』（江戸城大奥の生活）、雄山閣出版、一九八〇年、初版は一九六五年）。
- (6) 山本博文『徳川將軍家の結婚』（文芸春秋、二〇〇五年）。

山本博文『大奥学事始め』（日本放送出版協会、二〇〇八年）。

(7) なお、関口すみ子は、『柳営婦女伝系』などを使用して、荻生徂徠が大名の妻たちを「埒もなき者」と呼んで非難している姿を通じて、「江戸時代における、女と権力をめぐる言説、男たちのうめきと凱歌を収集し、それを説明しうるコンテクストを見いだすこと」を目指し、徂徠の『政談』と『柳営婦女伝系』の記述は何らかの関係があると推測した（関口すみ子「荻生徂徠の「奥」批判」、『御一新とジェンダー』東京大学出版会、二〇〇五年）。関口は、『柳営婦女伝系』では、柳沢吉保の側室正親町町子は、「妓女」であったという素性が、大名の妻批判から暴露されたとして、綱吉・家宣政権時の奥で重要な役割を果たした公家との結びつきがある町子への批判となったとしている。『柳営婦女伝系』で、「正親町実豊の娘」という町子像がうち砕かれ、享保末年以降になって歴史が書き直されたのである」と位置付けた。確かに徂徠やその考えの似た人物が『柳営婦女伝系』を書いたのであるならば、町子批判のためにという推測もありえるが、現状では直接的なその関係は明らかにならず、妥当性があるとは考えられない。さらに、関口は、この『柳営婦女伝系』の記述は、内容の類似性から「徳川家と関連

のある武将・家臣の事績などを集めた『明良洪範』が出所ではないかと類推している。しかし、この点も記述は似ているが、直接的な因果関係は不明である。

(8) 東京大学史料編纂所所蔵の『武家諫懲記後正』の「附録」である一〇三「諫懲記附録外戚」は、「大橋系図・大河内系図」だけの抜書きであるので、今回は検討の対象から省いた。

(9) 『武家諫懲記後正』は、他にも田安德川家所蔵（国文学研究資料館寄託）のものもあるが、この本には「附録」はない。その「序」には、「前人以テ武家勸懲記為ス題号ト、寛文延宝之間流布ス于世上ニ、是レハ此レ頼メ往古ノ勘忍記ニ、大略雖編トイヘ輯ヲ之旧世家傳之演説、殊ニ荒々略々過賜多シ、未タ見聞不及其ノ口傳者ハ、不顯此ニ有除メ之ニ、其後宝永正徳年中再ヒ補之号ス、武家諫懲記普ク世ニ雖令ト傳來、猶烏考改正者也」とあって、他の『武家勸懲記後正』の「序」とは違い、「將軍外戚評判記」についての記述はみられない。田安德川家には『柳営婦女伝略』・『將軍御外戚伝』といった書物もあるが、『武家勸懲記後正』の「附録」であった形跡はみられない。

(10) 現存していない一〇五『武家諫懲記附録』の広島藩浅野家旧蔵本と、東京大学史料編纂所所蔵の一〇三「諫懲記附録外戚」は、「大橋系図・大河内系図」だけの抜書きで

あるので、今回の検討対象から除く。

- (11) 一〇四『武家諫懲記後正』（盛岡市中央公民館所蔵）。
- (12) 『増訂国書解題』（六合館、一九〇四年）。
- (13) 三二〇番の場合では、附録として『柳営婦女伝系』だけではなく、『柳営儲孫事録』という元文二年（一七三七）にはなく、『柳営儲孫事録』という幕府内の動向が書かれた書物もある。『柳営儲孫事録』は附録ではなく単独の書物としてもあり、こちらも『柳営婦女伝系』と比べると流布はしていないが、同様にのちに『柳営秘鑑』の附録になったと考えられる（『柳営儲孫事録』東京大学附属図書館所蔵）。
- (14) 『増訂国書解題』（六合館、一九〇四年）。なお、『国史大辞典』（松尾美恵子執筆）の「柳営婦女伝叢」の項目には、『柳営婦女伝叢』の「序」で三田村鳶魚が指摘した菊池弥門が『柳営婦女伝系』の作者であるという説には確証がないとしている。
- (15) 『將軍御外戚伝』においても四代將軍家綱の生母宝樹院のみは、実績が書かれ、その後に系図がある（四二三『徳川將軍御外戚伝』東京大学附属図書館所蔵）。
- (16) 四二三『徳川將軍御外戚伝』（東京大学附属図書館所蔵）。
- (17) 高柳金芳『史料 徳川夫人伝』（人物往来社、一九六七年）。それは、「ここに疑問とするところは、『柳営婦女伝系』と『玉輿記』がその文体こそ多少異なるが、記述の内容

において全く同一の個所の余りにも多いということである」という指摘である。さらに、高柳は『玉輿記』に関して、『柳営婦女伝叢』所収の『柳営婦女伝系』には、例えば「瑞光院殿伝」の木下清兵衛の任官の部分には、「伊賀（玉輿記には伊豆と作る）守に任せらる。」とあり、『玉輿記』を参照している記述があると述べている。なお、『柳営婦女伝叢』所収の『柳営婦女伝系』の定本については不明である。早稲田大学附属図書館所蔵の四一四・四一五番の『柳営婦女伝系』の写本は、「国書刊行会」の原稿用紙を使用しているが、「玉輿記には……」という記述はみえない。

(18) 「將軍外戚評判記」が成立した年に関して言えば、「今大君吉宗公」・「今享保廿年」（二〇一長野本）や「當將軍家重公」（三二〇葵文庫本）という記述があり、本により差があるので、十分な検討が必要であるが、享保期以降に成立した様である。

#### 【附記】

本稿は、「大名評判記」に関する調査の一連の研究である。若尾政希先生をはじめとする調査メンバーに御礼申上げる。特に小関悠一郎氏には、史料の情報提供など特にお世話になった。記して感謝申上げたい。